

安永麻里絵氏の博士学位請求論文、「「展示不可能なもの」の展示 カール・ヴィートのアジア美術研究における美術史学と人類学」は、20世紀前半から中葉にかけて活動したドイツの美術史家カール・ヴィート（1891-1980）によるアジア美術の研究と展示を詳細に調査、考察し、美術史学と人類学が交錯する地点から正当な再評価を試みた独創性の高い研究である。

今では歴史の中に埋もれてしまった感のあるカール・ヴィートであるが、1910年代から1920年代の早い時期に、現地調査に基づく日本仏教彫刻の研究書を出版し、「オランダ領東インド」の美術と文化に関する著作を刊行している。安永氏が注目するのは、西洋の美術史家がアジアという非西洋圏の美的な造形物や芸術の在り方をいかに理解し、その価値を判断し、とりわけ美術館という枠組みの中でどのように提示したかという根本的な問題にほかならない。西洋美術史の価値判断とアジア美術の固有性との間に横たわる矛盾を鋭く意識したヴィートは、本来は美術作品として制作されたわけではない「展示不可能なもの」を異文化の空間の中で展示するという試行錯誤に一つの帰結を見出した。美術史学と黎明期の人類学を架橋しながら、西洋と東洋の相互理解の臨界点を極めようとするヴィートの困難な知的営為を見事に掘り起こした著者は、その生々しいプロセスを叙述、分析し、比較文化史的な意義を洞察している。

このような課題に取り組むために、著者はアメリカ、ドイツ、スイス、オランダのアーカイブでオリジナル資料を博搜し、写真、書簡、原稿などカール・ヴィートの関連資料をくまなく精査した。その結果、未公開の重要な新資料を発見し、ヴィートの思想と営為をより正確な形で浮き彫りにすることに成功したのである。忘れ去られていた美術史家の類例のない多彩な相貌を定着させたこの論文は、ヴィートという人物の正当な再評価に寄与するばかりでなく、ポスト・コロニアル時代における美術史研究に確かな学問的達成を付け加えたと言えよう。

本論文は「本文」と「付帯資料」から成る。本文は全6章から成り、序論、結論、参考文献一覧、図版が加わる。以下、論文の構成に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序論において、カール・ヴィート研究の不十分な現状を確認し、本論文の意義と構成を述べた後に、第1章「 Folkvangel Museum とカール・ヴィート」ではヴィートの自己形成について論じられ、とりわけ Folkvangel Museum の創設者カール・エルンスト・オストハウスとの出会いの重要性が述べられる。西洋美術と非西洋圏の美術をともに収集し、調和を成すよう展示した Folkvangel Museum は、ヴィートによる未来の試みの無視し得ない起点となっており、その後も継続するオストハウスと美術館との協力関係が資料に即して丁寧にたどられている。

第2章「伝統と近代の狭間でーヴィートの日本体験」では、ボロブドゥール遺跡の写真に魅せられてアジアの美術への関心をかき立てられたヴィートが、ウィーン大学美術史研究所で日本の仏教美術研究に取り組み、1913年から1914年にかけて日本を

訪問し、奈良に滞在して飛鳥天平時代の仏像を調査した体験が詳しく跡づけられる。それは苦勞して貴重な仏像の写真撮影を行い、日本の生活文化を肌で知り、「仏とは、見る物ではなく、拝むものです」という言葉から文明の多様性の認識と西洋文明の相対化への契機を得ていく日々であり、その叙述は精彩を放っている。

第3章「仏教彫刻のための美術様式論—『8世紀までの日本の仏教彫刻』」では、日本滞在の成果である仏教彫刻の研究書（1919年）について考察している。ヴィートはヴェルフリンの様式分析を用いて「様式発展史」としての日本仏教彫刻論を企て、東洋美術独自の視覚形式を抽出しようとしたのだが、多数の複製写真図版に基づくその成果はヨーロッパの研究者に刺激を与え、その影響は日本にまで波及した可能性がある。近代日本の美術制度の整備、西洋美術史学の方法論、日本における仏像受容と美術史学の発展などが結び合う地点に位置する著作という指摘は興味深い。

第4章「「オランダ領東インド」の文化芸術とヴィート—叢書《アジアの精神、芸術と文化》と『ジャワ』」、及び第5章「「幸福な楽園」をめぐる—グレゴール・クラウゼのバリ写真と『バリ』」で分析するのは、日本滞在後に訪れたオランダ領東インド（現インドネシア）の芸術と文化に関して、ヴィートが1920年代に出版した2冊の本である。『ジャワ』において、ヴィートはボロブドゥールなどの遺跡を研究する際、様式分析のみならずオランダのインドネシア考古学の成果も加え、宗教や図像の説明も含めている。一方、ドイツ人医師クラウゼのバリ写真を集めた『バリ』に寄せた文章の中で、ヴィートは徹底的な西欧近代批判を展開し、西洋人にとっての「楽園」を演出するクラウゼの写真がはらむ植民地支配の矛盾を浮かび上がらせている。ここには美術史学から出発し、考古学、人類学に接近するヴィートの姿がある。

第6章「「展示不可能なもの」の展示—イ・ユェン美術館における仏教彫刻展示」において安永氏は、ヴィートが1923年にオランダ初の東洋美術館であるアムステルダムのイ・ユェン美術館において、西洋の枠組みにとらわれることなく異文化の美術品を本来の文脈を尊重しながら展示する最初の試みを、仏像を対象に行ったことを説得力とともに提示する。美術史的観点と人類学的観点を併用し、鑑賞空間と礼拝空間を接合したその成果は、西洋と東洋の価値観や美意識の差異について考え抜き、悩みつつも「展示不可能なもの」の展示を模索し続けた、ヴィート初期の活動の到達点と見なすことができるのである。

以上のように、本論文はカール・ヴィートという類い希な美術研究者の歴史的位置づけに成功している。その画期的な功績を認めるとともに、美術史と人類学、異文化理解と展示論、著作と複製写真など多くの問題を踏破する視野の広さを高く評価する点でも、審査委員全員の意見は一致した。新資料の発掘、著作や展示の的確な分析、学際的で斬新な考察は、本論文の重要な成果と認められた。審査委員からは問題点の指摘がいくつかあった。複製写真の技法理解の必要性、先行研究提示の不十分さ、人類学的美術史への言及の欠如、引用原文の欠落などだが、これらは本論文の学問的寄与を決して損ねるものではないこと、本論文を刊行する際に、他の修正点や誤字脱字と合わせて修正すべきことが確認された。

以上の審査の後、審査委員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、安永麻里絵氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。